

まんだら通信

第150号 (通巻182号)

平成20年(2008)12月 佛誕2574年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
post@shiunji.org

極楽の箸と地獄の箸

いつ、どこで聞いた話か覚えがない話なのですが。

西新宿の朝日カルチャーセンターで、ひろさちや先生の仏教入門講座を、前後五年ほど聴いたことがあるので、その時だったかも知れません。元々は、お経の一節かも知れないと思っっています。尤も、講義の最初の三十分と最後の二十分以外は殆ど居眠りでしたから、余り良い生徒ではなかったはずですが。

地獄と極楽で使う箸は、長さがとても長いのだそうです。一メートルはあるのでしょうか。

当たり前ですが、一人ではとても食べにくい。ではどうするかというと、差し向かいに座って、お互いに相手に食べさせるのだそうです。



極楽ではみんなが仏様と同じような心を持っていきますから、相手が食べたいものは自分のことのように良く分かり、相手の欲しいと思ったものを口に運んでやります。

前に座った人も同じことをしますから、和気あいあいとした楽しい食事が進みます。

では地獄の住人はどうかというと、ご想像のように、自分だけ良ければ人のことなど構っていられない世界ですから、というより、そういう心掛けだから地獄に住むことになったわけですから、食事の時もケンカばかりで、結局お腹いっぱいになれない。

こういうことの繰り返しでは、いらいらが募る一方ですね。

今年を振り返って、このような自分のことしか思い浮かばない人が起こした事件が、「誰でも良いから殺したかった」、「ラベルを張り替えて、有名産地の品に見せかけた」とか、お年寄りを騙してお金を巻き上げるなど、何と多かつたことかと思えます。

こう考えると、地獄や極楽はあの世だけではなく、既にこの世にあるということとで、「自分だけ良ければ」と思っている人は、既に地獄に住んでいるということですね。

日本にいるだけでは良く分かりませんが、外国から見ると、日本はまだまだ他人思いの人の人が多い、ということも誇っている国です。私たちが当たり前と思っている自動販売機は、ヨーロッパでは外では盗まれるから店内にしかないそうですし、中国人は「むき出しのお金を表においてある」と思うそうです。

地獄と極楽の箸はどちらも同じもので、使い方が違うのですね。日本ならまだ間に合うと思えます。



除夜の鐘と元朝護摩

今年も、残すところ二十日余りになりました。

あつという間に過ぎて行つたこの一年を振り返って、あなたの一年は如何でしたか。

マアマアだったと思う人も、そうでもなかったなあと思う人も、来年の家内安全を本尊様に祈って除夜の鐘を鳴らしましょう。

甘酒などのお接待はいつも通りですが、今年「まんだら通信」の読者で、佐倉市にお住まいの大森さんが、ポケット・ティッシュ入れを作って下さいましたので、先着百八名さまに差し上げます。

また、恒例の元朝護摩は、年が改まった元日の夜中十二時からです。

お一人お一人のお名前を本尊さまにお伝えしながら、懇ろにお祈り致します。

初穂料はこれも例年通り二千円です。お申し込みはお早めどうぞ。お誘いあってお参り下さい。



余滴

◆今月の野草はオケラ【きく科オケラ属】です。里山の、割合に乾いた日当たりのよいところに生えます。草丈は50~60センチ。三芳地区の野村さんに教えてもらい、中堰近くで先月初めに写したのですが、リュウノギクやリンドウと同じように、行く秋を惜むかのように、頼りなげな日差しの中の晩秋に咲く野草です。燃料が薪だった頃は、程よい日差しがあつて山の下草も元気に育っていましたが、誰も山に入ることがなくなって、マテバシイ(とうじい)などがのさばって、林床に日光が届かなくなり、里山の野草が絶えてしまいました。撮影した里山は、地区の人たちが毎年下草刈りをして綺麗にしてあるので、季節ごとの野草が咲いてくれる貴重な場所です。若い芽のお浸しは美味しいそうです。

◆裏面『敬礼』のように、新聞記事や雑誌の文章を転載することがあります。大学に行っている孫が「無断で転載するのはいけないじゃないの」と言っているのを聞いてメールで確かめました。産経新聞の返事では執筆者の諒解を得た上で、所定の申請書を送って新聞社の諒解を得る、というものでとても面倒で実際は使い物になりません。MOKUは、有り難いことに最後の文面の通りですが。文章を書いた人の知的財産権は守らなければなりません。営業ではない『まんだら通信』のように、無料のものにまで当てはめるとするのは少し窮屈過ぎると、我が儘なことを考えます。書いた人の住所など、個人情報保護法があるので、調べようがないことが多いのですから。2008/12/09 龍渉

敬礼

最近、防衛省のトップの論文が問題になって
いますが、昭和十六年十二月八日は日米開戦。
この季節になりますと、どうしても戦争に関す
る記事や番組が多くなりますね。

意外に思われるかもしれませんが、私も生意
気にも本棚から戦争関係の本を取り出して、よ
く読んでいます。でも、私が読むのは、出征し
ていった兵隊さんたちが家族に送った手紙です
ね。これを読みますとね、世の中にこんなむご
い別れが二度とあつてはいけないって思うん
ですよ。

たとえば、こんな手紙があります。

フミちゃん、日本は今非常の秋に直面してい
ます。淋しいのはよくわかります。

しかし、こらえて下さい。フミちゃんは立派
な日本の娘になつて幸福に暮らして下さい。こ
れ以上に私の望みはありません。お父様のこと
宜しくお願ひします。私は心配をかけたばなし
でこのまま征きます。その埋め合わせをお願
ひします、他人が何と言え、お父様は世界一
の人であり、お母様は日本一立派な母でありま
した。

この名を辱めない日本の母になつて下さい。
父母の素質を受け継いだフミちゃんにはそれだ
けの資格があるのですから。何も動ずること
のない私もフミちゃんのことを思うと涙をとめる
ことができます。

けれど、フミちゃんは泣いてはいけません。
太一はこんなにも幸福に死所を得て行つたので
ありますから。そして、やがてお母様と一緒に
なれる喜びを胸に秘めながら。
軍艦旗高く揚がるころ、菊水の紋章もあざ
やかに出撃する私たちの心の中、何と申し上げ
ればよいのでしょうか。

回天特別攻撃隊菊水隊 今西太一、只今出撃
します。

ますらおの かばね草むす あら野べに 咲きこ
そ匂え 大和なでしこ

父上様 フミ様

出撃の朝に 太一

(鳥巢健之助『人間魚雷』)

また、奥さんに宛てたこんな手紙もありました。

まりえ殿

かねて覚悟し念願していた「海征かば」の名誉の
出発の日が来た。日本男子として皇国の運命を背
負つて立つは当然のことではあるが、然しこれで
「俺も日本男子だぞ」と自覚の念を強くして非常に
うれしい。

短い期間ではあつたが、心からお世話に相成つ
た。俺にとつては、日本一の妻であつた。

小生はどこに居ろうとも、君の身辺を守つてい
る。正しい道をまっすぐ生き抜いてくれ。いわゆる偉く
するともいらぬ。金持ちにする必要もない。日本
の運命を負つて、地下百尺の捨石になる男子を育て
上げよ。小生も立派に死んで来る。

充分体に気をつけて、栄え行く日本の姿を小生の
姿と思いつつ、強く正しく生き抜いてくれ。
大東亜戦争に出陣するに際して。

妻へ 章 (同)

最初の手紙の今西太一少尉と次の手紙の佐藤章少
尉は、ともに人間魚雷回天搭乗員として、南太平洋
ウルシー環礁で玉砕しています。まだ若き二十代の
青年でした。そして、手紙は愛する妹や妻に宛て
た、まさに「遺言」だったのです。
それで思い出しました。ある夕方、仕事を終え、
帰宅途中、花屋さんに寄りまして。
今日、妻が誕生日だったことに気がついたからで
す。

バラ、胡蝶蘭、カーネーション、カラー・・・色
とりどりの花が咲き誇っています。
「すいません、カミさんが誕生日なもので、花束を

作つて下さい」

すると、花を選んでいらした品のいい八十歳
ぐらいの着物姿の老婦人が私のほうを見まして
ね、にっこりなさつて、こう、おっしゃつたの
です。

「あら、奥様に花をプレゼントなさるの？」

「はい」

「そう、日本もずいぶん変わったのねえ。男性
が愛する女性に花束をあげるなんて、こんな素
晴らしい時代になつたのね」

「おかしいですか？」

「ううん、素敵です。あなたの奥様、幸せね。
私が心の中で思ひ続けていた人はね、ある日、
突然訪ねてきて、『行つて参ります』とだけ言つ
て、軍服姿のすがすがしい眼差しと敬礼だけを
私にくれて、帰つてこなかった。それから私は
ずっとひとり。
私の一番きれいな時だったのに」

落語家三遊亭鳳豊さんが月刊MOKUの12月
号にお書きになつた『にっぽん人情小噺』第三
六話の転載です。
ご本人の住所はわからないので、出版社に転
載の許可をお願いしたところ、次のように返事
がありました。

「ご愛読いただきましてありがとうございます
です。
お問い合わせのありました「にっぽん人情小
噺」の転載の件でございますが、筆者・三遊亭
鳳豊さんからは「どうぞ、お使いください。ア
レンジしていただいてもかまいません。いい話
はみんなの宝物です」というご返事をいただき
ましたので、ご連絡申し上げます。
よろしくお願ひ申し上げます。
ご連絡遅くなりまして失礼いたしました。
月刊MOKU編集長 前田洋秋」

私の兄弟子の保田龍秀中尉もそうですが、日
本という掛け替えのない国を守るために戦死し

た人たちや、海外で亡くなった人、戦災の
被害に遭つた人たちが犠牲になり、この国
の礎になつたからこそ、経済力第二位の今
の日本があるということを忘れたくありま
せん。

この『敬礼』の一行目「最近、防衛省の
トップの論文が問題になっていますが」と
いうのは、航空幕僚長だった田母神俊雄さ
んが、戦前の日本の歴史的地位を書いた
『日本は侵略国家であつたのか』のことです
ね。話題になつた途端、政府はためらいな
く退職させました。要するに首切りです。
大東亜戦争について、政府の見解と違
うからというのが理由ですが、普段は政府や
首相はなつとらんと一斉攻撃するマスコミ
や野党が、今度ばかりは不思議なことに産
経新聞以外は、政府と一緒になつて田母神
さんを非難しました。

ところが世論調査では、反対に田母神さ
んが正しい、という意見が多かつたのはご
存じの通りです。
先月号をお送りする時、一部の方にこの
論文の全文の複写を同封したところ、教え
てくれて有り難うという、予想外の反響が
多く、こちらがビックリしました。

新聞やテレビは真実を報道する、と思つ
ている人が今でも多いのですが、必ずしも
そうではありません。インターネットで世
間を見ることが出来る人は、マスコミには
まやかしかつたことを良く分かつていま
す。例えば今の国会で、国籍法の改正案が成
立しました。使い方でとても危ない法律な
のに、閣僚も良く分らないうちに、衆議
院を通過してしまつたのです。

インターネットで、改正案の中味を知つ
た全国の人たちが反対運動をした結果、参
議院では充分ではないまでも、付帯決議付
きで何とか成立したといういきさつがあり
ます。民主主義という仕掛けは、選挙の
しつぱなし、お上任せではいけないとい
うことですね。